

中世

第7章 武家社会の成長 4. 戦国大名の登場 (1) 戦国大名

因幡・伯耆の戦国武将—西伯耆村上氏—



永禄7年(1564)平佐就之書状(鳥取県立博物館蔵『宮本家文書』)★

解説

■西伯耆の村上氏—商人的性格を持った戦国武将—

この資料は、毛利元就の重臣である平佐就之が、1564(永禄7)に西伯耆の武将である村上太郎左衛門に宛てた書状である。

村上氏は、米子平野の淀江(米子市淀江町)周辺に勢力基盤を持ち、日本海水運にも関わった商人的性格を持つ戦国武将である。この地域の商人たちともつながりがあったと考えられる。

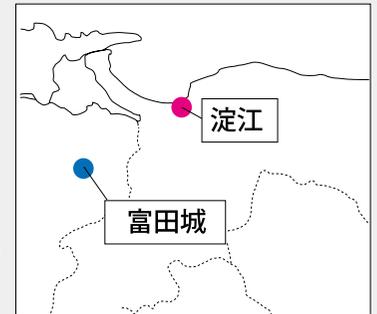
この書状が出された当時、毛利氏は尼子氏の本拠地である出雲の富田城を攻めており、その東側にあたる西伯耆で尼子軍と激しく戦っていた。合戦は長期にわたり、両軍ともに兵糧物資の確保が大きな課題となっていた。この書状は、そのような中で出されたものである。

■毛利氏の兵糧統制と村上氏

1カ条目によれば、村上氏は毛利氏から兵糧米100俵を渡すと伝えられている。当時の村上氏が毛利軍の兵糧米の受け取りや管理を任されていたことがわかる。

2カ条目によれば、毛利氏は村上氏に「兵糧留」を徹底するよう強く命じている。「兵糧留」とは敵方の兵士が兵糧を入手できないよう、戦線地域の商人たちの自由な売買を禁止する作戦である。毛利氏は村上氏を通して商人たちの経済活動を統制し、尼子方の武将が兵糧を入手するのを困難にしていた。

こうして毛利氏は村上氏を通して地域商人を味方につけ、尼子との戦いを優位に進めて、やがて勝利を収めていく。戦国時代の合戦では、地域社会に影響力をもつ武将の働きが勝敗に大きな影響を与えていたことがわかる。



(担当：岡村吉彦)

参考資料

- ・岡村吉彦「毛利氏の兵糧政策と西伯耆国人村上氏」(『鳥取地域史研究』第7号、2005年)
- ・岡村吉彦『鳥取県史ブックレット4 尼子氏と戦国時代の鳥取』(2010年)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。

【意訳】

一 御兵糧米について、百俵を渡す約束であったが、五十俵は受け取ったか。残り五十俵についても承知している。すぐ申し付けてそちらへ送る予定である。

一 その方面の「兵糧留」を堅く命じるように。毛利の家人と称して、奉行人の許可状を持たない者にも兵糧米を売買しているようだが、もつてのほかである。制札を送るので、今後は制札に判を加えている毛利奉行衆の許可状を持たない者へは兵糧米を売らないようにせよ。(以下略)

【読み下し文】(一部のみ抜粋)

一 御兵糧米の儀、百俵約束申され候、然らば五十俵御請け取り候や、相残り今五十俵の儀、心得申し候、やがて申付け、まいらせらるべく候、

一 その表、兵糧留の儀、堅固に仰せ付けらるるの由、尤も肝要候、然りと雖も、家人と号し、奉行衆の一通等無く候へ共、米売買候哉、然るべからざる儀候、それにつき、制札これをまいらせられ候、この加判の衆一通これ無く候はば、兵糧の儀、御出し有るまじく候、そのため、制札調べ、これをまいらせ候、この旨を以て仰せ付けらるべく候、(以下略)

二月十日 就之(花押)